

天文学の研究環境改善のための国際会議

1992年6月30日—7月2日の3日間、パリのユネスコ本部講堂において、上記の国際会議 (Adverse Environmental Impacts on Astronomy) が開催される。

天文学はこの20年あまりの間に急速な発展をとげ、宇宙のいろいろな問題に対する答を出し、それらの答が新しい問題提起をしてきた。観測的には、可視光による天文学ばかりでなく、電波、赤外線、紫外線、X線、 γ 線と広がり、いわゆる全波長天文学となってきた。さらに、宇宙線、重力波、ニュートリノ等の観測が加わり、又、惑星探査機で目的の天体まで到達して調査がされるようになった。そして、大きく区分けして、太陽系の誕生、星の誕生と進化、銀河の構造と生成、宇宙の誕生と終焉についての議論ができるようになってきた。

天文学は今やあらゆる科学と密接な関係を持つようになってきた。旧来の光学や原子物理学ばかりでなく、素粒子物理学は宇宙論や中性子星と、固体物理学は星間塵や惑星と、化学は星間分子や星の大気と関係がある。さらに地形学や生物学までが関係するようになり、SETI (Search for Extraterrestrial Intelligence) 問題では社会学者も参加するようになってきた。

天文学が急速に発展しすぎたために、天文学の研究の重要性が一般の社会の人々の間ではあまりよく理解されていない。幸い星空の美しさについて関心を持つ人は多くなってきたが、それは単に美しいものを見たいという域をあまり出していない。一方では、逆に快適な生活を求めるために天体観測環境を破壊している場合がある。そして、そのことは光公害、電波干渉、スペース・デブリとして現実のものとなってきている。美しく飾りつけられた街灯は夜空から星々を奪っている。人工衛星などを使った電波通信は天体の電波観測を不可能にしている。人工衛星打ち上げ用のロケッ

トなどの破片はスペース・デブリとなり、X線などの天体観測衛星ばかりでなく、気象衛星など他の目的の衛星に衝突して、それらの機能を低下させ始めている。

多くの人々は地球環境問題の重要性を少しずつ認識するようになった。人類の快適な生活環境を保つための方策は世界各国において議論され、政治家の間でも認識され始めてきた。しかし、天文学がおかれた環境についての認識はまだ十分ではない。その結果、天体の観測、研究環境はあまり改善されないできている。天文学は科学の一つの分野である。一方、上に示したようにあらゆる科学分野と結びつき、宇宙の誕生などの疑問に解答を出そうとしている。そして、その中に存在する人間とは一体何かという疑問に答を出すための基本的な情報を提供するという意味において、その研究の重要性が増してきている。

今回の国際会議は国際天文学連合とユネスコが共催するものである。ユネスコの参加により、天文学者ばかりでなく各国の政治家やマスコミの人の参加が多く期待される。それらの人々の理解を得ることが、それぞれの国での天文学への支持を得る重要なひき金とできるであろう。このようないわゆる素人の人を対象としているので、講演は判りやすいばかりでなく印象的なものでもなければならぬ。C. セイガンやR. ウェストなどが講師として考えられている。日本では森本雅樹氏が電波障害について話す予定である。得意の若干下品だがユーモアある講演をしていただけたらと思う。

私は国際天文学連合天体観測環境保全委員会の副委員長であるので、準備のお世話をしている。又、国立天文台の香西洋樹氏が中心となって行っている日本の夜空の明るさ分布 (環境庁が主催しているスター・ウォッチング・プログラムと協力して得られた) を印象的な形で展示する予定である。

1992年は国際宇宙年であり、ここでもいろいろ

な試みが行われる。これらの会議や催しをより有効なものとする事によって、日本でも世界全体でも天文学への関心を高める努力を続ける必要がある。今回の会が成功するよう多くの方々のご協力をお願いしたい。なお、関心のある方は国立天文台天文情報普及室あてに資料を御請求下さい。

磯部瑠三 (国立天文台)

コワール第2周期彗星 (1991 f 1) の検出

埼玉県深谷市の石川正夫氏は、1991年12月12日と13日(世界時)に撮影したパトロール写真の原板上に光度14等級の移動する彗星状のイメー

ジを発見し、さらに14日にこれを確認した上で国立天文台に連絡してこられた。

国立天文台ではその像を詳細に調べた結果、彗星状天体として国際天文連合天文電報中央局へ連絡した。国際天文電報中央局のB. G. マースデンと、群馬県の小林隆男氏はこの観測から1979年に発見され第1回目の回帰が未検出で、第2回目、1991年12月28日に近日点を通過する予定のコワール第2周期彗星の回帰であることを確認した。それによると、近日点通過は54日早くなり、周期は6.430年から4.385年になる。

香西洋樹 (国立天文台)

月報だより

第8回小惑星会議のお知らせ

今回は新大阪駅の近くで次のように開かれます。出席を希望される人は、お申し込みください。詳しいことをお知らせします。

日時と会場：第1日目：1992年6月6日(土)

13時から21時まで

大阪ガーデンパレス

(新大阪駅西800メートル)

第2日目：6月7日(日)

10時から14時まで

大阪市立科学館(北区中之島4丁目)

1階研修室

申し込み先：〒651-13 神戸市北区藤原台北町

4丁目18-5 長谷川一郎

締 切：1992年5月15日(金)

関西天文同好会 20周年記念助成研究決定

関西天文同好会では、創立20周年記念事業として優秀なアマチュアの研究に総額20万円の助成金を差し上げるための論文を公募(天文月報1971

年7月号)しておりましたが、去る11月24日に無事記念式典を終了し助成研究が決まりましたので報告させていただきます。当日は、関東から九州にかけて約80名の参加者がありました。応募研究13題の内11題の応募者の発表もありました。

選考の結果、関天20周年記念研究助成金は下記の4研究に差し上げることとなりました。

◎しし座ガンマ流星群及びジャコビニ流星群の流星物質の軌道計算による次回出現予報

長谷川隆氏 60,000円

◎彗星の新しい撮影法

柏木周二氏 60,000円

◎同時観測によるTV流星の軌道

上田昌良・藤原康徳氏 60,000円

(選考委員会で協同研究と判断し複数名の表彰といたしました)

◎太陽黒点ダイレクトアンシャープマスクの試作実験

長 兼弘氏 20,000円

助成研究の選考にあたり多数の先生方のお力添えを頂きました。紙面をお借り致しまして厚く御礼申し上げます。

関西天文同好会 佐竹真彰